

## 冬の水

松岡隆子

崖下の日の射すところ藪柑子  
存分に晴れて冬至の日なりけり  
はればれと菰卷の松日をこぼす  
わが影を真直ぐに容れて冬の水  
極月の滝音に身を打たせけり  
一斉に寄りくる鴨に手ぶらかな  
あを空のどこまで青き寒の入

一切を封じ凍湖の無音なる  
凍沼の底に眠れるものの息  
雪撥ねて伸びくるものの青きかな  
雪しづる音をくぐりて急ぎけり  
熱爛や馬関の海の荒れをらん

寒入りの五日、初句会に向かう車窓に雪の富士を見た。西武池袋線の富士見台駅を過ぎた辺りだった。寒晴れの空に肅然と輝く富士に身を正す思いがした。松の内の初句会は目出度く華やきがあった。六日は雪を見て選句に暮れた。七日は五月会の初吟行で雪晴れの新宿御苑を巡った。池や沼はことごとく凍り、雪に覆われた無音の世界に心を奪われた。斯くして始まった俳句の日々は新型コロナウイルス感染症の第六波に阻まれ、第六波は何としても防御せねばならない。自粛に努めよう。